市長賞
小林花穂「森の芸術家」

森の芸術家

忠生第三小学校　四年　　小林（こばやし）　花穂（かほ）

ぼくは、クモ。でもただのクモじゃないよ。ぼくはげいじゅつ家のクモ。森の木の枝や葉に糸を張ってクモの巣アートを作っている。ぼくは巣にかかった虫たちは食べない。木の実や、じゅえきの方がすきなんだ。だからぼくの作品を虫たちにも見てもらいたいと思っている。今日はどんな作品を作ろうかなぁ。糸を枝から葉へ、ていねいに張ってきれいなもようを作る。うん、いい感じだ。つかれたから、少し休けいしよう。ぼくはひとねむりした。

目をさますと、なんと、ちょうちょが巣にかかっていた。ちょうはぼくを見ておどろきあわててにげようと羽をばたつかせた。一度巣にかかってしまうとなかなかにげられない。

「大丈夫だよ。食べたりしないから。」

ぼくは、巣の糸を切りそうっと巣からちょうをにがしてあげた。ちょうは羽を大きく動かした。その羽は今までに見たこともないくらい美しかった。ちょうは、ぼくのまわりをダンスするように飛びまわりどこかへ飛んで行った。ぼくはあんなきれいな羽のような作品を作りたいと思った。

次の日からあのちょうのことを思いだしながら作品作りにむちゅうになった。何度もしっぱいをくりかえしやっと完成した。でも何か足りないような・・・。

その時、通り雨がポツンポツンとふった。くもの巣にしずくがついた。雨がやんだと思ったら、次はきれいな花びらがフワフワふってきた。ぼくは空の方を見あげた。

この前のちょうが仲間をつれて花びらをはこんできてくれた。巣にしずくと花びらがつきキラキラと光る。ぼくの作品は、ついに完成した。いつか町の教会で見たステンドグラスみたいだった。

それからというものぼくの作品は森の中で有名になり、たくさんの虫や動物たちが見に来てくれるようになった。

（７１５文字）

市長賞
小林花穂「森の芸術家」

審査員講評

****

なんて素敵なお話でしょう。本来は食べられてしまう側のちょうを逃がしてあげるという展開に心が温まると同時に、芸術家魂に火がついたときのクモの気持ちもありありと伝わってきました。ちょうが自分だけでなく、仲間もつれてきてくれるのもいいですね。しずく、花びら、ステンドグラス……美しいクモの作品が目に見えるようでした。

――　田丸　雅智